

難波宮址

昭和46年度(第39次・第40次)

難波宮跡調査報告書

難波宮址顕彰会



序

わたくしは、ことし1972年の春83歳を迎えました。すぐる1年間、私共の研究の成り行きについて深く考えつづけて参りましたことは当然であります。発掘現場を守ってむづかしい研究調査をおすすめ下さった皆の努力は大変であったことかとひそかに深い敬意をおぼえておりました。その成果のわかるのはいつかいつかともっておりまして所、3月7日の朝、大阪の発掘事務所から電話があり先般来の法門坂町の東部の発掘は予定通り一応成果をあげましたから、御覧ありたいとのことに、午後早速出向くことに致しました。いって見てびっくりいたしました。元の陸軍被服廠のありました所、地表面下、8尺ばかり下部から、奈良朝時代の緒土の層が実によく、掘り出されていたのであります。鉄分を含む粘土層で、奈良朝以前の土地を知る目安になる地層、その出土状態を見て私共はその時代の判定に役立つこととしている。この粘土層の上部は、明治中期以後、陸軍被服廠構築の際にいじった地盤とて、様々の建築建造の際の工事のあとをしのぶべき、様々の材料を含んだ地盤である。その厚味は曲尺で8尺ばかりあり、明治中期に使用した各種の建築資材が介在しているのである。元々そのあたりは、明治以降、陸軍練兵場として軍の方で使いつづけた土地とて、そこを整地して、使用したことで、その名残りが、明確に残っているのである。我等が今日発掘して知り得た、緒土の地盤以下の地層は綿密に調査することによって、往古奈良朝時代われ等の祖先が宮廷の建築を営造した場所は、往昔の緒土層以下の地盤がまさしくそれに当るもので、そこには、難波宮址の姿を如実に指摘し得るのであって、更にこの後とも、一層の注意を払って、綿密なる研究考察を加えねばならないと思う。今次調査の成果について見ても、実に多量の古代建築の柱穴が発見せられているのであり、それ等を総合研究調査することによって往古の皇居の姿を復元し得るとの期待をいだかせているのである。

尚最近の発行になる林屋辰三郎博士の著書『日本の古代文化』(岩波書店)並に佐藤武敏博士の多年にわたる力作『長安』(近藤出版社)の二著を座右にお供え下さることを祈る。

昭和47年3月

難波宮址顕彰会専門委員
文学博士

山根徳太郎

第 39 次 発 掘 調 査 概 報

調 査 所 大阪市東区法円坂町 1 大阪市有地内 1,455 m² (約440坪)
調 査 期 間 昭和46年 5 月 1 日～昭和47年 2 月26日
調 査 者 大阪市教育委員会 難波宮趾顕彰会

第39次調査は、後期（聖武朝）難波宮の大極殿院地域の史跡公園整備に先立ち、昭和43年度の第33次調査以来継続的に行っている調査の一つであるが、調査地の都合で二回に分けて実施した。前半の調査は後期（聖武朝）難波宮¹⁾大極殿の前庭とその下層の第37次調査地域（大極殿跡）南部で発見された掘形列のつづきを明らかにするために、第37次調査のすぐ南に丁字状にトレンチを設定した。後半は後期（聖武朝）難波宮大極殿の閤門とそれに接続する南回廊を明らかにする目的で、閤門から西へ大極殿院西回廊との接続部までの約80m、日赤法円坂分院北側の道路（閤門、南回廊のおよそ北半分に当たる）を調査地とした。調査地の東部と西部は第13・15次調査地²⁾と部分的に重複している（Fig. 1）。

調査地は中世の大溝が後半の調査の中央部を走って、後期（聖武朝）難波宮の基壇を破壊しているのをはじめとして近世や明治以降の様々な掘込みや削平が非常に多く、遺構の残りが悪いために、調査は難行した。前半のトレンチの西部の一部に整地層が認められたが大部分は近世擾乱のせいもあって褐色色砂質の地山であった。

〈後期（聖武朝）難波宮の遺構〉

大極殿の周辺には小石敷があり、西側は約3mでなくなっているが前面は中軸線で約11mであり、その先の範囲は不明であった。第39次調査では旧地表の大半が失われて、小石敷は南約12mまでと約27m付近に残っていただけだが、小石は削られて痕跡だけ認められる所もあった。小石敷の範囲は中軸線より西約18mの所にもあるので、中軸線を中心にごく限られた幅で閤門から大極殿中央階段に通路的にあったのではなく、前庭の相当広範囲か全面にあったと考える。小石敷の現存高をみると大極殿周辺が他より約5cm高い。一部には小石敷より高い遺構面に小石がみられないので、もとはもっと厚い小石敷だったであろう。

閤門及び回廊地区も後世の盛んな土地利用のため遺構の残りは悪く、南回廊の柱痕跡とみられるものが2カ所と回廊の北側溝の一部、西回廊では東側溝の底部を僅かに検出した

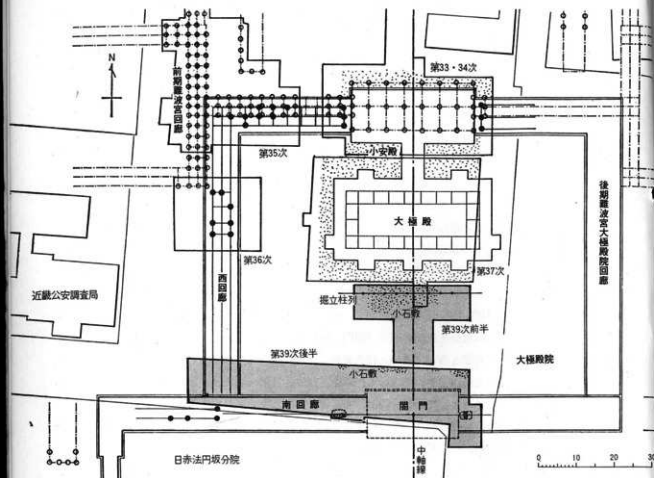


Fig. 1 第39次調査地域略図

にとどまる。南回廊の柱跡とみられるものは二つ共不完全なものであるが、東西 2.3 m 以上南北約 1.9 m の大きなもので、堀形の中央に凝灰岩片・重文系瓦を混入した不整形の埋土がある。礎石の掘えずけ痕ではなかにという。南回廊の中西回廊との接縁部と壁土約 9 m とすばうこれらの痕跡は中央線上についている。側壁とも西回廊の柱痕跡とは大きな違うのであるが、一応柱礎を想定しておきたい。大板敷院回廊南西入隅の近くで北側溝が、溝石はぬえとられ埋土には凝灰岩片・瓦片を混入した状態で見えられた。溝幅約 1.6 m、北側のぬえあたりは幅約 0.8 m で、及び西回廊の約 1.4 m、約 0.45 m に比べている。南回廊の北側溝は凝灰岩石がすばうで溝幅が広がったところである。

南回廊と西回廊の接続部は南回廊が西にのびて十二堂院北西隅につづくので側溝は「上」字

状に合流して西へ流れる(図面2)。回廊の入り口より西の西回廊基壇では溝は暗渠となっており溝底石の高さが、内庭の側溝より約0.3m低くなって、水抜きを容易くしている。一面に凝灰岩切石の底石が約2mと側石1個が原位置に残っており、中軸線より西54.6mの溝の幅幅が変っている。中軸線より西約54.6mの位置は第35・36次調査で判明している西回廊基壇の西端になり、基壇内の溝内法は0.6m、西側溝との合流点では0.45mであったことがわかる。このように内庭の水抜きを基壇部で暗渠にしてし溝幅は広く段落をつけたるやり方は大極殿院北西隅でも認められる。また西回廊側溝との合流点と西回廊柱筋に当たることを約1.8mにわたって掘溝を両側に控えている(写真の)。以上と第15次調査の成果とを合わせると、西回廊の柱筋の延長上に第15次で検出した南回廊の柱跡は北西、中軸と西側柱との中間にある。そしてこの柱跡は奥行約2.4mの1間で十二世紀北西隅の建物につづくのである。大極殿院回廊と十二世紀回廊がどのような接続していたのかは現在ではわからず、今後の発明を待ちたい。

閤門の遺構は明らかにならなかった。しかし、大極殿の南面からは雨落溝の一部と柱跡とみられる彫形が検出され、また掘乱層中ではあるが重圓文・軒瓦を含め瓦類が出土して建物の存在を示唆しており、後廬とはいえないまでも何らかの形で大極殿院南面は閉じられているので、閤門の存在は疑いないことであろう。今回出来なかった南半の部分での調査で閤門の存在が確認できればであろう。

遺物は重圈文系瓦類、鴟尾小片等が出土している。

＜その他の遺構＞

難波宮造営前の小地形や宮以後の遺構が検出された。第37次調査地南部で発見した東西掘形列と関連する遺構は今回発見があった。大板敷南端より約8.5mの石敷下、整地層上に東西の小掘形立柱列があった。柱間距離約2.9mで9間分見つかってさらに東西につづく。方位は難波宮とはほぼ同じで時期は聖武朝前、天武朝以後であろうが、抜き取り穴に壁装はみつかっていない。欄である。この掘形調査中に小石敷下より円端点珠の無子葉芹文軒瓦が出土した。飛鳥時代の四天王寺式のものである。難波宮跡からは、後円難波宮より古い瓦の出土がみられる。造或時の混入かあるいは遺構を伴うものか、飛鳥時代住居址とも合せて検討する必要がある。難波宮以後では後期（聖武朝）難波宮の瓦片をへらするU字溝や、小ピット等、難波宮廃絶後あまり時間を経ていないとみられる遺構から近世の大きな掘込みまで、難波宮後の上町台地を知る上の資料も得られた。中でも第22・38次調査で発見して日赤構内から法円坂付近まで上町台地を東西に走る溝は、直線ではなく中輪渡より約28mで北折して大極殿院南庭北部を東進していた。幅は約5m深さ約2.5mのU字形で排水のあとがあり、極殿は室町時代の巴文軒瓦を出して近世以降の

遺物は出土していない。第38次調査で中世の防禦用堀ではないかと報告したがそれをさらに裏づけるものであろう。

(註1) 難波宮跡では大別して前・後二つの時期の遺構が発見されている。全面に火災に遭った痕跡があり天武天皇朱鳥元年正月に焼失した難波宮に比定できるものと、奈良時代の瓦を伴出するものである。これによって前者を「天武朝」難波宮、後者を「聖武朝」難波宮と仮称している。しかし調査の進行につれて「天武朝」難波宮が長柄倉跡宮でもある可能性が強いことや、「聖武朝」難波宮に造替が認められて長期間のものであることが判明して従来の言い方が必ずしも適切でなくなった。そこで現在は朱鳥元年焼失の宮を前期難波宮、聖武朝に造替された宮を後期難波宮と称している。しかしここでは「天武朝」・「聖武朝」の呼称が長年使われており両者を並用した。

難波宮址顕彰会『難波宮址の研究』第6冊(昭和45年)

(註2) 第13次調査は昭和36年に行われ、大極殿跡・小安殿跡等を発見して難波宮跡調査に画期的な成果を取ったのである。間門の部分では南北にトレンチを入れて大極殿と十二堂院地域との間がどうなっているのか、例えば藤原宮や平城宮のように回廊で前面を閉じて間門があるのか、または平安宮のように龍尾堀になるのかを調べた。しかし調査面積が狭いことから十分な成果が得られていない。第15次調査は昭和37年に実施して、大極殿院南西隅から十二堂院の北西隅及び西堀地帯を明らかにし、両院の規模を推定復元している。この時には大極殿院の内庭は東西101.33m南北68.73mで、中軸線から大極殿院西回廊の中柱までの距離は55.21mと考えていた。所がその後第35・36次の同回廊の北半部の調査では中軸線より中柱まで約50.40mで約5m規模が小さいことがわかった。今回は約50.40mで大極殿院南西隅を推定し、それらが約5m規模で遺構の残りがよかつた南回廊北側溝(後述する暗渠の部分)に当るので、そこを含めて調査した。

難波宮址顕彰会『難波宮址の研究』第5冊の1(昭和39年8月)

(八木久栄)

第40次発掘調査概報

調査箇所 大阪市東区法円坂町 大阪市住宅供給公社敷地内
法円坂住宅3号館南広場 270 m² (約82坪)
調査期間 昭和47年1月17日～3月31日
調査者 大阪市教育委員会 難波宮址顕彰会

第40次調査は、第38次調査に引き続き、前期(天武朝)難波宮朝堂院東回廊部分の確認と、前期及び後期(聖武朝)難波宮朝堂院の外側にあたる官衙地域を探索することを主目的に調査をおこなった。第38次調査では、すでに発見されている前期(天武朝)難波宮朝堂院の西回廊を中軸線で対称に東へおりかえし、朝堂院東回廊の推定位置に回廊柱穴が発見されるか否かを調査した。調査の結果、中央柱穴と東側柱穴の2箇所を検出したが、西側柱穴は住宅専用駐車場があるため発掘できず、桁行方について中世大溝で破壊されていたために確認することができなかった。

そこで今回は、法円坂住宅南端にあたる3号館の南広場を利用し、回廊推定位置に10m×10mのトレンチと、さらに東へ22m×6mの枝トレンチを設定した(図2)。

調査は住宅構内のため騒音の問題があり、ブルドーザーやパワーショベル等重機は使えず、全て人力で掘削し動力バルトコンペアーで土を搬出する方法でおこなった。また調査にあたって、大阪市住宅供給公社の関係者及び法円坂住宅の人々の協力と多大な援助をうけた。ここに記して厚く謝意を表したい。

調査開始後、まもなくして雨が多くなると共に、この場所は明治から戦前にかけて陸軍被服廠が建てられていた所で、地表下20cmぐらゐから1.5mぐらゐまでコンクリート塊やレンガ塊片が多数に出土し、さらに、被服廠建物基礎や煙突の基礎等で2.5m下まで掘削をうけており、その除去にかなり手間だった。しかし、調査が進行するにしたがって予想通りの位置に前期(天武朝)難波宮朝堂院東回廊柱穴が検出され、トレンチ東部からは難波宮造営前の掘立柱穴が発見された。

《後期(聖武朝)難波宮の遺構》

土壌一全体を検出していないうえ建物基礎でかなり破壊されていたが、推定直径約8m、深さ30cmの大きな掘り込みが検出された(写真⑥)。この土壌は前期朝堂院回廊柱

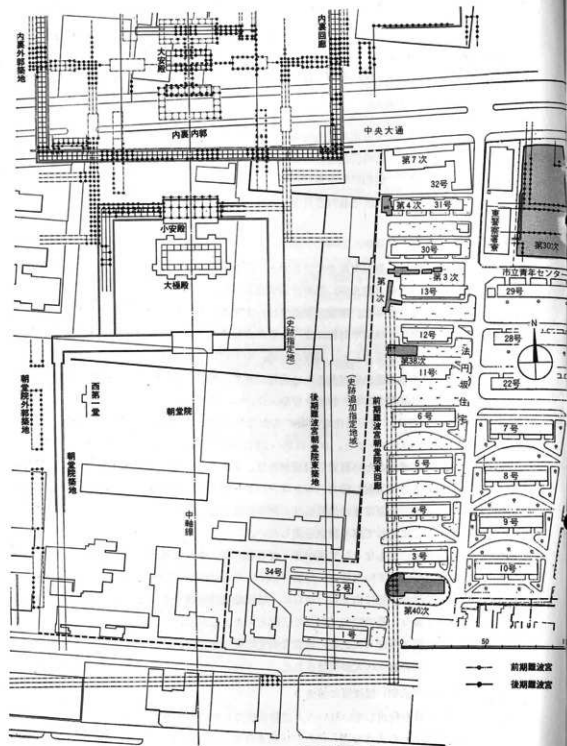


Fig. 2 第40次調査地域略図

穴を切って顔り込んでいる。また、土壌内上部から瓦片が出土し、上面に一部瓦埋積が発見されたが第1次調査から第4次調査の発見されたような広範囲な瓦埋積は検出されなかった。瓦埋積の検出されなかった部分は、削平されて消失したものと考えられる。レベラを測ると瓦埋積のほうが低く、もともと瓦埋積は部分的にしかなかったものと考えられる。土層から出土した瓦片の量からみて、瓦溜めといえるものではなく、この土層の持つ性格は明らかにではない。しかし、この地域から奈良時代の瓦が検出されたことは、周辺部に後期(聖武朝)難波宮の遺構が存在していることが予想される。

◀前期（天武朝）難波宮の遺構▶

回廊・トレンチの関係及び攪乱のため、柱間3間分計10個所の掘形を確認したが、柱底跡を検出したのは4個所であった。柱間寸法は、桁行2.90m、梁行は2.65mから2.75mとばらつきがみられた。柱穴の直径は東西回廊約27cm、中央柱は約29cmと比較的細い。また中央柱は、東西柱よりも深い。

第38次調査で発見された前期朝堂院車庫回廊中央柱と第22次調査で発見された前期朝堂院西回廊中央柱の心点距離は 233.40 ㎝、第 40 次中央柱と第26次中央柱の心点距離も 233.40 ㎝で、前期（天武朝）難波宮朝堂院・西回廊は中軸線に関して完全に対称となる。次に第38次中央柱から第40次中央柱までの南北心点距離は 139.3055 ㎝となり、往間48間分とすると、その桁行間柱目法の平均値は 2.90 ㎝になる。なお、第22次から第26次調査で検出された朝堂院西回廊の桁行・梁行間柱目法平均値はそれぞれ 2.92 ㎝、2.63 ㎝になっている。

これらの柱穴より多量の焼土・焼壁が出土していることは、日本書紀天武朱鳥元年正月条に「難波大藏省失火、宮室悉焚。」とある記載の如く、かなり広範囲な地域まで火災にあったことを物語っている。

さらに、中央柱掘りより須恵器杯の蓋が完形で発見された(写真印)。この蓋の口縁径は10cm、器高2.85cmで天井頂部にやや扁平な宝珠形つまみがつぎ、口縁部内面にえりをもつが、えりの先端が口縁部以下に突出している(図.3)。また内面は凹状による横ナデで調整し、さらに天井中央部に仕上げナデが認められる(図.3)。この型式の須恵器は難波宮の整地層及び下層から出土しているもので、難波宮のC型室に相当する¹⁾。これは斉明天皇元年(655)に造営されたといわれている原京官址推定地の下層から出土した土器や陶器が宮城群のTK217型式に相当するもので7世紀中葉を下らぬと思われる。



Fig. 3 前期朝堂院回廊掘形出土
須恵器杯の蓋



Fig. 3 前期朝堂院回廊掘形出土
須恵器杯の蓋

前期難波宮の遺構に伴って、時代判定のできる資料が出土した例は今までなく、また、前期難波宮の造営時期が大化改新時まで遡るかどうかについて論議されているだけに、今回前期朝堂院回廊部分の上限を決め得る資料が出土した意義はきわめて大きく、貴重な資料となろう。

《その他の遺構》

宮殿造営前の掘立柱穴が多数発見された。現在一つの建物としてまとめられるものは少なくとも3棟あるが、規模は不明である。また、住居址群の柱通りが北東-南西方向を示すものと、北-南方向を示すもの、さらに同じ方向でも掘形の重複するもの等からみて、かなりの時期差が認められる。これらの住居址群は、第30次調査地域内から発見された飛鳥時代の住居址群と同様の建物と考えられる。飛鳥時代の住居址群は、第30次調査からまともな発見されている他、上町台地北端一帯にかけてかなり広範囲に確認されている。その重要性についてはすでに述べられているが、第40次調査の発見でその規模の大きさ及び性格が一層明らかにすることができた²⁾。

その他、瓦片を含む小掘立柱穴も検出されているが、まとまった建物にはならない。

法円坂住宅内の発掘調査は、第1次-第4次調査、第7次調査と第38次調査、今回の第40次調査と多くはないが、遺構の遺存状況は隣接する第30次調査の成果を含めて、部分的に複乱をうけているが、きわめて良好である(Fig. 2)。また最近では、市有地を中心とした内裏・大極殿地域周辺の調査が多く、宮城周辺部における調査はかなり遅れている。都城制の問題を解明するうえにおいても、宮城を早急に確認することが必要であり、今後周辺部における調査も積極的に取り組まなければならない。

今回の調査は団地内での発掘ということもあって、地域の人々の難波宮に対する関心は益々高まってきている。

昭和42年に出土された史跡追加指定予定区域は、土地境界線を基準にして機械的に設定されているために、前期難波宮朝堂院東回廊址が除外されている。これまでの調査で明らかに法円坂住宅内の遺構の遺存状況がきわめて良好であることを考えれば、この地域の史跡追加指定を含む広範囲な保存対策が早急に図られなければならない。

(注1) 中尾芳治「難波宮造営前の遺跡調査報告」『難波宮址の研究』第五冊の二、昭和40年1月)

(注2) 田辺昭三「飛鳥・奈良期の須恵器」『日本美術工芸』6月号393号 昭和46年6月)

平安学園考古学クラブ「陶器古窯址群I—研究論集第10号」(昭和41年4月)

(注3) 難波宮址顕彰会「昭和43年度(第30次)難波宮跡調査報告書」(昭和44年4月)

(宮本都雄)

今年度の調査にあたっては、難波宮址顕彰会専門委員の諸先生や奈良国立文化財研究所の沢村仁氏から御指導・御教示をうけたことをここに記して、厚く謝意を表する次第である。

難波宮址顕彰会専門委員として長年御指導下さった三品彰英先生が、昭和46年12月19日薬石効なく逝去された。また、第8次調査以来長年にわたって難波宮の発掘調査の第一線で献身された村上保二氏が、昭和46年5月23日急逝された。お二人の御冥福を心からお祈りするとともに本概報を御霊前に捧げたい。

昭和46年度発掘調査参加者

山根徳太郎(難波宮址顕彰会専門委員、文学博士)

中尾芳治、八木久栄(大阪市立博物館)

長山雅一、宮本都雄、中川信作、吉光佐知子(難波宮址顕彰会)

林 紀昭(滋賀大学)

木原克司、川口隆子、金藤まり、山田秀成、萩野雄二、広瀬義晃、島田隆司、松本孝子、

辻 裕美、米田信子、後藤容子、岩本篤子、原 久子、高嶋俊二、田村康生、清田誠二、

中口敬一(大阪市立大学)

東雲 均、足立卓雄(関西学院大学)

福田 裕(河内考古学研究会)

徳永園治(写真撮影)

図

版



① 前半調査地域全景
(北から)



③ 後期難波宮大極殿前面の小
石敷とその下層の小堀形列
(西から)



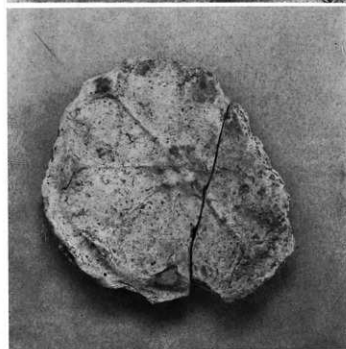
② 後半調査地域遠望
(北から)



④ 後半調査地域全景。中央の低
い所が中世の大溝(東から)



⑥ 後期難波宮大極殿院南回廊の
北側溝（西から）



⑧ 無子葉弁文軒円瓦
（飛鳥時代）

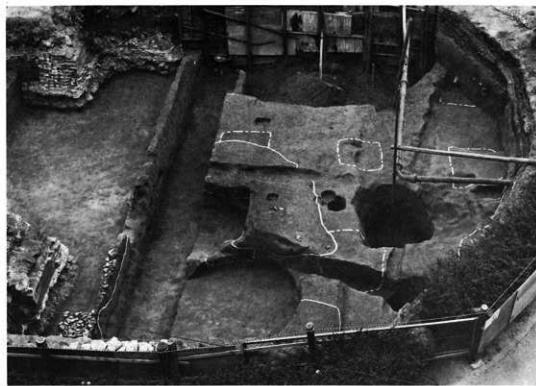
第40次調査



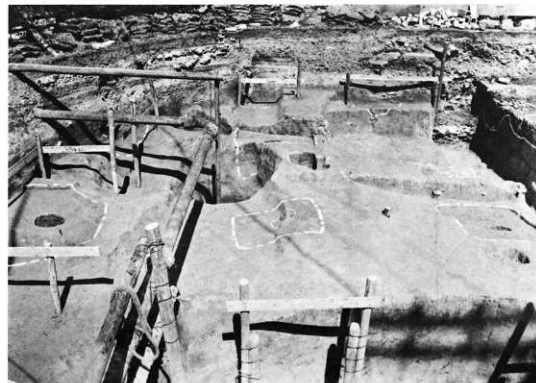
⑦ 調査地域遠望（東から）



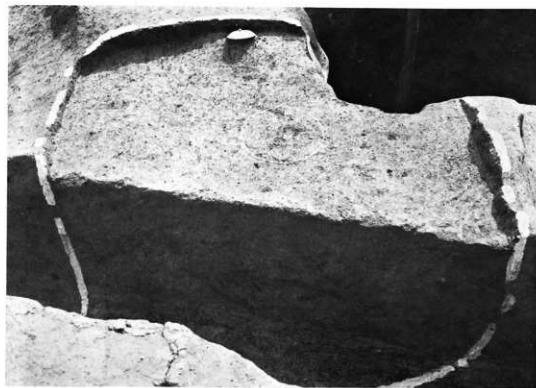
⑨ 調査地域全景（北から）



⑩ 後期土壇及び前期朝堂院東回廊柱穴（北から）



⑪ 前期朝堂院東回廊柱穴（南から）



⑫ 前期朝堂院東回廊柱掘形より出土した須恵器杯の蓋（北から）



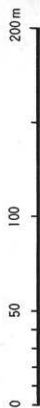
⑬ 難波宮下層遺跡住居址掘立柱群（南から）

昭和46年度（第39次・第40次）
難波宮跡調査報告書

昭和47年3月

編集・発行 大阪市教育委員会

（印刷 ナニワ印刷株式会社）

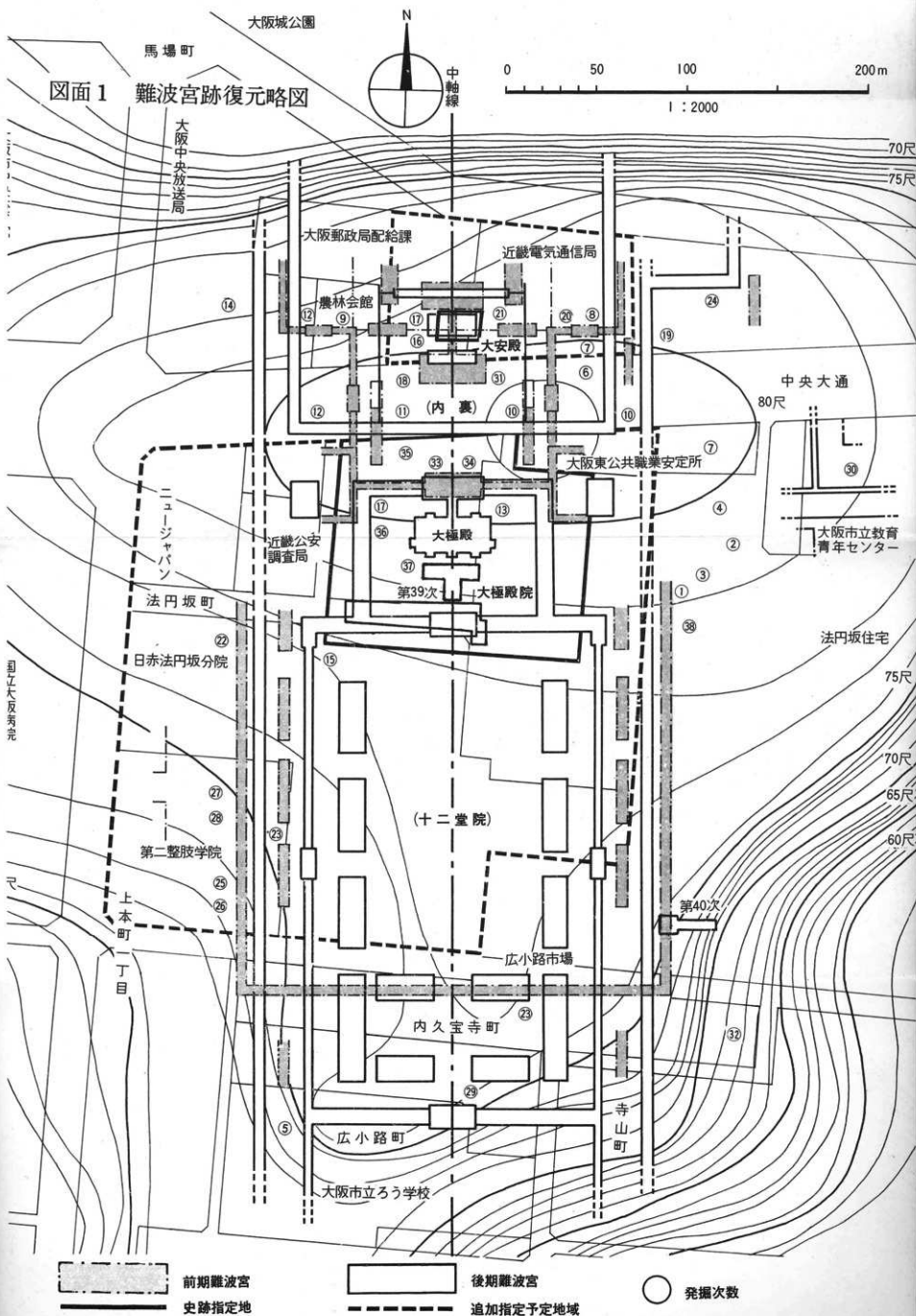


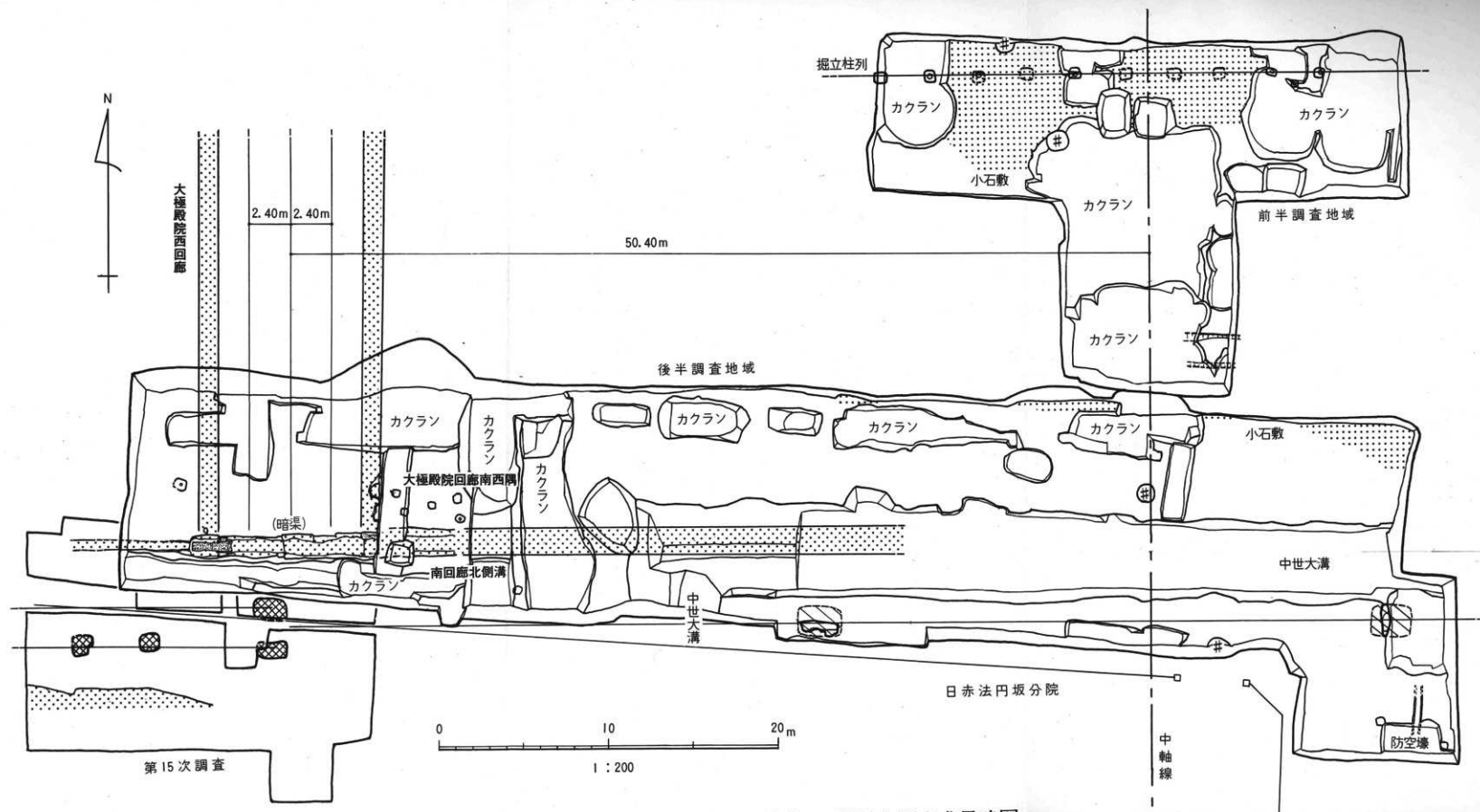
大阪城公園

馬場町

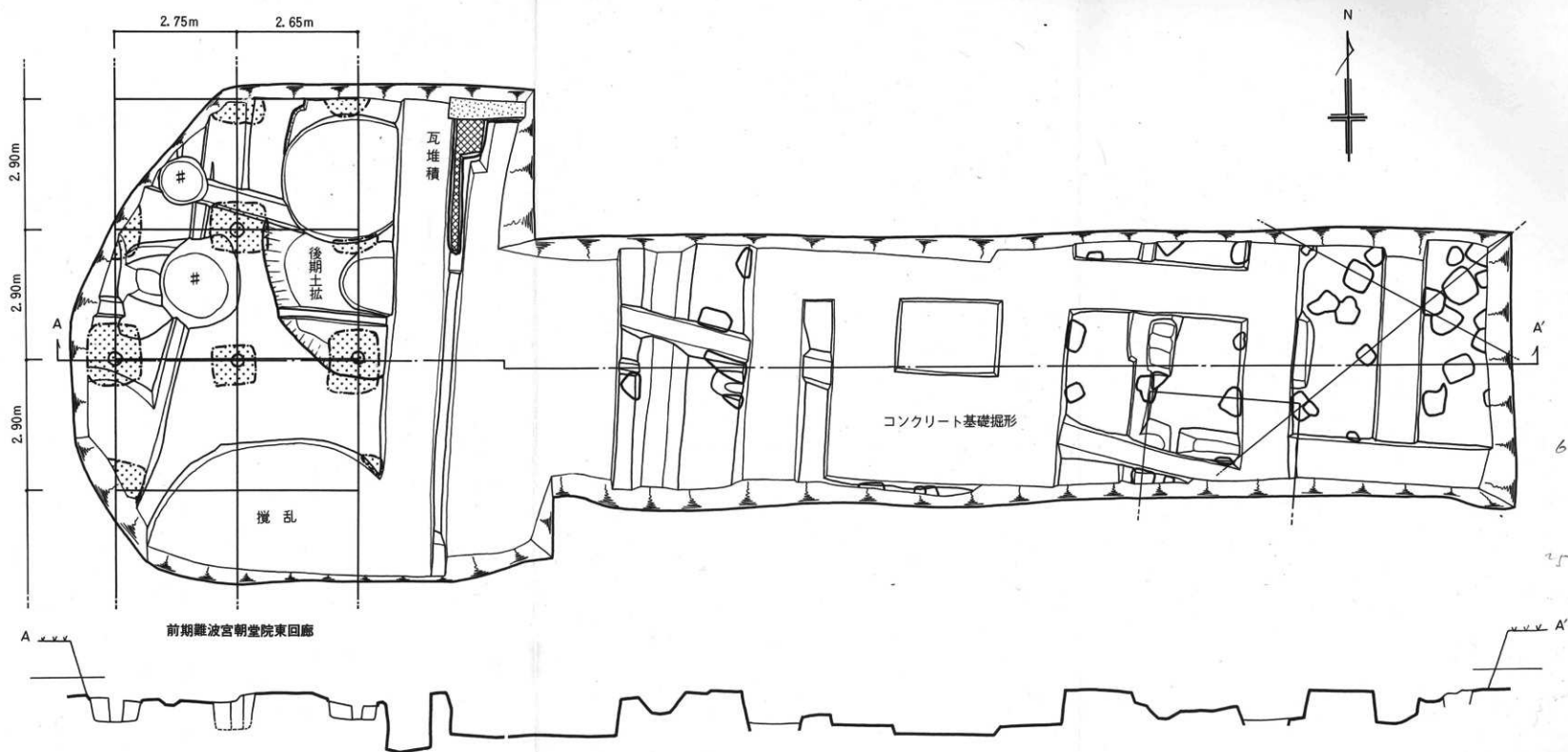
図面 1 難波宮跡復元図

図面1 難波宮跡復元略図





図面2 第39次調査成果略図



図面 3 第40次調査成果略図